

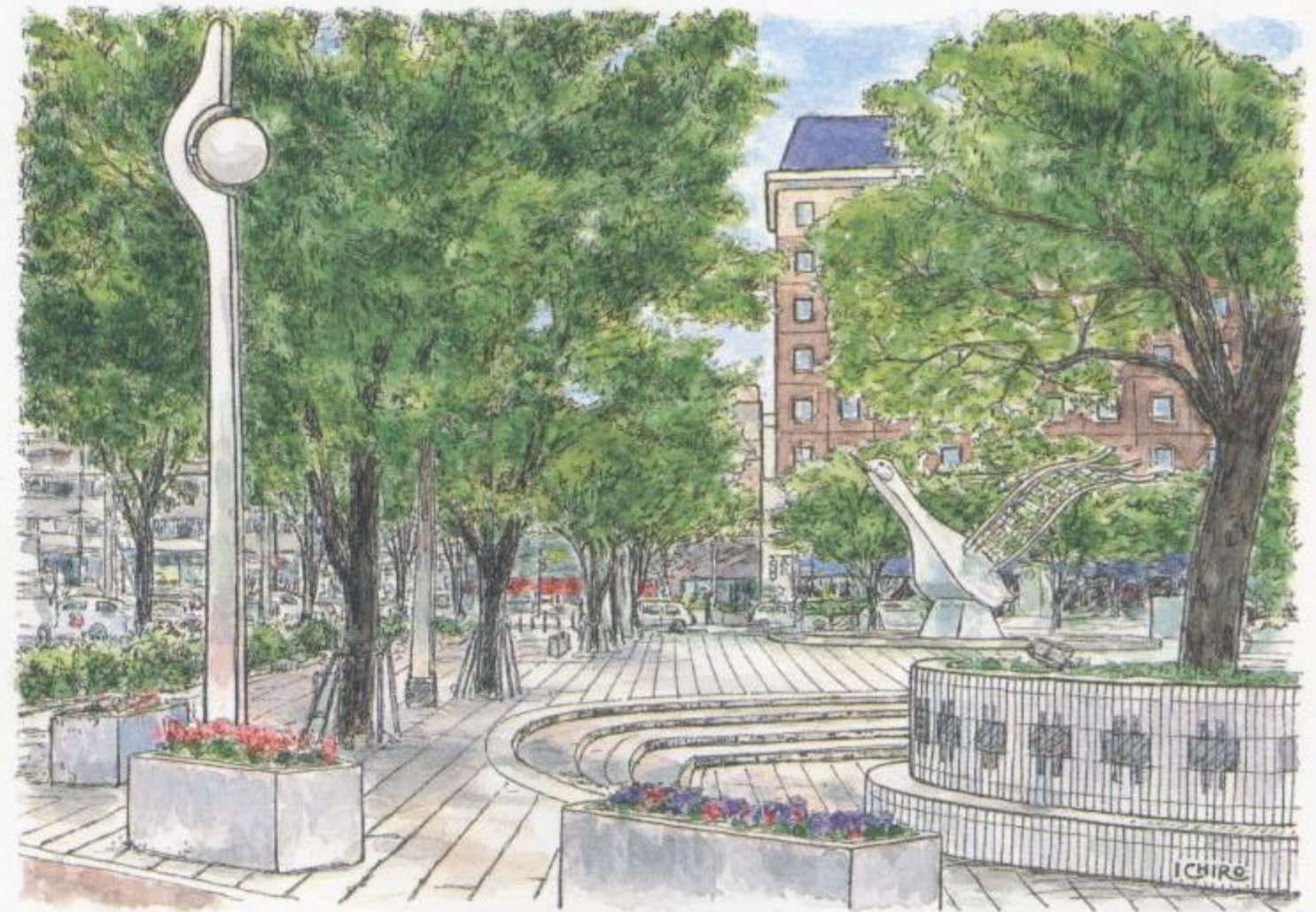
さらびあ

2007・11



さらびあ

Vol. 12



NHK文化センター米子教室
小説・エッセイ講座

目次

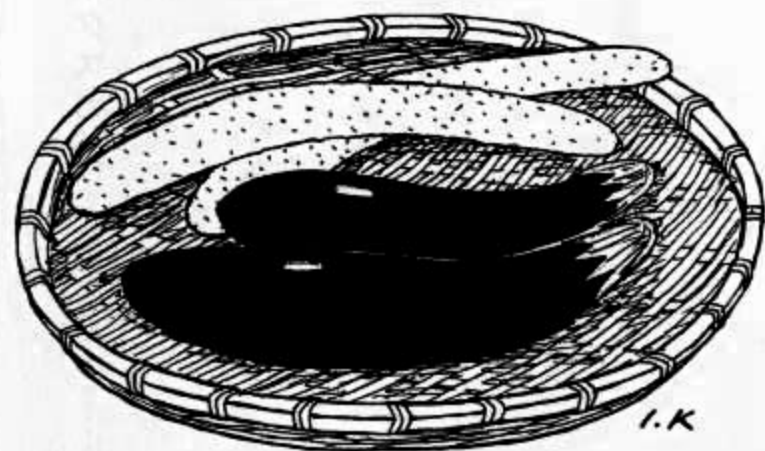
終わらない夏	宮原玲子	1
茜雲の向こうに	池田侑子	13
私の因縁物語	足羽喜代子	32
チクリンの花	東あき	40
雲の国の男	西村幸人	45
翔び立つ	草かすみ	65
アメリカ一寸見	音田八千代	80
ビーズ・パラダイス	成瀬洸	101
山路 遙か	森脇千壽夫	108
花口分校の思い出	伊藤礼子	122

野ゆき山ゆき	増田慶子	141
オタスの杜	南久仁	153
「小説・エッセイ講座」のご案内		100
あとがき		173
執筆者名簿		174

題字・表紙	梶岡一郎
カット	増田慶子
	梶岡一郎

終わらない夏

宮原 玲子



ツクツクボウシの蟬しぐれを聞きながら、僕は地べたに座ってお供えのぼた餅をほおぼっていた。

「四年一組、松崎真二君だね」

背後からふいに声がした。驚いてもちが咽につまりかけた。げんこつで胸をたたきながら振り向くと、大きなリュックを背負った男が立っていた。どこかで見たことのある顔だ。しかし誰だろう？僕は咳き込みながら考えていた。すると、日に焼けた顔の男はきれいに並んだ白い歯を見せ笑いながら、僕の背中を指さした。

「カードに名前が書いてあるよ」

ラジオ体操の後、公民館の広場からこの丘に駆け登ったときに後ろに回ったのだらう。出席のハンコを押すマスが一つだけ残ったカードを、僕は急いで手でかくした。

「悪いけど、君んちで水を飲ませてもらえないかな」
無精ひげの男は頼んできた。気取った言葉使いはこの辺りの者でねえな。でも確かに見覚えのある顔だ。そうだ、ばあちゃんに聞いてみよう。僕は立ち上がり、ズボンの尻を手で交互にはたいた。そして顎をしゃくつ

た。

「水がほしけりや、ついて来いよ」

門をくぐると、センばあちゃんが井戸端で、畑から取りたてのキュウリやナスのどろ落としをしているのが見えた。僕達が納屋の前を通り抜け井戸の手前まで来たとき、洗い終わった野菜を盛り上げたザルをかかえて、ちょうど振り向いた。

僕らを見た途端、ばあちゃんは上まぶたの垂れ下がった目を大きく見開らいた。そして震えるくちびるから声をもらした。

「ヨ、ウ、ジ」

ばあちゃんは手に持っていたザルを落とした。そして、辺り一面に転がった野菜を拾おうとしゃがみかけた僕を突き飛ばした。

「なにするだあ」

僕が抗議して後ろを見ると、ばあちゃんは男の両腕をつかんで叫んでいだ。

「洋二、洋二でないか。よう戻ってきた。待った、待った、ずーっと待ったぞ！」

僕は尻もちをついたまま、何が起きているか理解

できなかった。次にばあちゃんは男の体をゆさぶり始めた。

「洋二、よく帰って来てくれた。バンザーイ。バンザーイ。アハハハ」

最近、元気のなかったばあちゃんの頭がおかしくなったのではないかと、僕は心配になった。立ち上がり顔を見ると、ばあちゃんは涙を流しながら笑っていた。男はあつけにとられた顔をしていた。

ばあちゃんは男の手をしっかりと握り、小さい体で、大きい男を母屋にぐいぐいと引っ張って行った。そして引き戸を開け、声を張り上げた。

「みんな、出て来い。洋二が帰って来たぞ。早く出て来おい」

ばあちゃんが大声をだすことはめったになかったの

で、何事かと、充にいちちゃんと弘美ねえちゃんが飛び出してきた。

「充は田んぼにおる父さんと母さんに、弘美は春三やちに、洋二が帰ってきたと知らせに行ってごしない」
にいちちゃんとねえちゃんはずいいて、走って出て

行った。ばあちゃんは洋二という名前の男の手を握りしめたまま、仏間にあがった。僕も一緒に付いて入った。鴨居に並んでいるご先祖様の写真の一枚を見て、僕は思わず声が出てしまった。

「これだ。この顔だ」

水兵服を着て敬礼しているおじさんの写真と、男は同じ顔をしていた。戦死したと思っていたおじさんが生きて帰って来たから、ばあちゃんは喜んでいいるんだ。やっとナゾがとけて、僕は安心した。

ばあちゃんは、洋二おじさんを仏壇の前に座らせてから、並んで正座した。

「おじいさん、洋二が無事に帰ってきました。仏様、ご先祖様、ほんにありがとうございます」

ばあちゃんは顔の前で手の平を上下にこすり合わせながらお礼を言っている。しかし、僕は気が付いた。待てよ。おじさんにしては若すぎないかな。でも案外年かもしれないし、もしかしたらタイムスリップして来たのかもしれないぞ。考えながら、写真と男を幾度も見比べた。

何回もお辞儀して、お礼が繰り返されたあと、ばあ

ちゃんは立ち上がって、やさしい声でいった。

「洋二。昼に祝いをするから、もう何処へも行ったらいけないよ」

黙っているおじさんに、

「洋二の好物ばかり作うから、何処へも行ったらいけんよ。わかつとるな」

ばあちゃんは繰り返し、低い声で念を押した。そして僕を横目でにらんだ。

「真二は洋二の傍に付いていてごしないよ。離れるだないよ。ラジオ体操のあとに、洋二の墓のお供えを盗み食いしていたことを父さんに黙ってやるけん」

ばあちゃんは僕を脅迫した。

楽しかった夏休みも明日で終わるというのに、いつものことながら僕の宿題は全くできていなかった。八月三十日はにちゃんとなえちゃんに「夏休みの友」を手伝ってもらう大事な日なのに、おじさんの出現のおかげで、家中が僕の宿題のことなど忘れてしまっている。僕はだんだん悲しくなってきた。

涙をこらえていると、ばあちゃんが朝御飯のソーメ

ンを持って入ってきた。氷水に腰をくねらせたソーメンが浸かっているガラス鉢を並べながら、ばあちゃん

はしゃべり始めた。

「洋二は泳ぎが得意だった。中学のときも、遠泳ではいつも三番以内だった。いつだかも、日野川で溺れている子供を助けて表彰状をもらったこともあるしな。ニューギニアで戦艦ごと海に沈んだと聞いても何かの間違いだと、どげに深い海でも洋二が溺れるわけはないと、絶対にどこかの海岸に泳ぎ着いてると、わたしには分かっとった。そのうえ、やつと届いた白木の箱には石ころしか入っとらんかったぞ。洋二は親孝行なええ子やったし、わしがこんなに待つとるけん、いつか帰って来てくれる、いつか元気な顔を見せてくれると信じとった。毎日仏壇にお願いして、毎日墓に参って願をかけとった。洋二が帰って来てくれたので、わしやほんにうれしい。死ぬほどうれしい」

ばあちゃんが話しているあいだ、おじさんは正座して、膝の上に手を重ねてかしまつて聞いていた。僕は腹がへつていたけど、涙声のばあちゃんの言葉を神妙に聞いていた。

ばあちゃんがエプロンのすそで涙を拭きながら出ていったあと、おじさんは動かずにじっとしていた。

「ソーメンが延びるから食べようか」

僕に促され、おじさんは重たそうに割り箸を持ち上げた。

僕らが無言でソーメンを食べ終える頃、とうさんが座敷に入ってきた。おじさんの顔を見ると、さすがのとうさんもしばらく口がきけなかった。おじさんは箸をおき、黙礼した。とうさんは首をひねりながら、

「はて、どげすうかなあ」

口の中で独り言を言い、しばらく考えていた。そして思いついたように正座した右膝をパンとたたき、畳に手を付き、頭をさげた。

「洋二、せっかく帰って来なっただけん、是非ともばあさんの作った祝いの料理を食べてやってください」

おじさんは、頭を下げたままじっとしていた。そのとき、かあさんが一房のバナナを手にとってやってきた。とうさんの横に座り、おじさんを見た途端、バナナはかあさんの膝から畳に転がり落ちた。口を開けたままのかあさんとうさんが何か耳打ちをした。する

とかあさんはおじさんの顔を確めるように見て、うなずいた。そして微笑んでお辞儀をして言った。

「洋二さん、どうぞ、お風呂に入ってごしなさい。そしてお風呂から上がりなったら、真二の夏休みの宿題を見てやってください。この子は四年生にもなめますが、今年もおそらく宿題ができてないと思います。すみませんをお願いします」

かあさんは頼んだあと、畳の上のバナナをテーブルの上に置いた。

「バナナは洋二さんの好物でした。おばあさんが言うには、冬に出征した洋二さんは、帰還したときバナナを腹いっぱい食べたがっておんなったそうです」

とうさんとかあさんが部屋を出て行ってから、おじさんはバナナを一本むしってしばらく眺めていた。それからやけになったように、バナナを五本たいらげた。「おじさん、無理しなくていいよ。これからいくらでも食べられるじゃないか」

僕の言葉を聞くと、おじさんは照れくさそうに笑った。

裸の付き合いの後でか、ずーっと黙っていたおじさんが口を解いた。

「真二君、僕のカルピスもあげるよ」

一度は辞退したが、おじさんが是非に言うので、僕はありがたくいただくことにした。一杯目で十分甘さを楽しんだので、二杯目は一気に飲むことにした。冷たいカルピスの咽越しは最高だった。

おじさんが器用に僕の字のまねをして、宿題をしてくれているあいだ、僕は手枕をしてテレビを見ていた。

「終わったよ」

そうおじさんが声をかけたとき、僕はうとうとしていた。時計を見ると二時間あまりたっていた。居眠りしている間に宿題ができるなんて、まるで手品のようだ。こんなことならずーとおじさんにいてもらいたい気持ちになった。

宿題という僕が背負っていた重い荷物を、おじさんの魔法で軽くしてもらい、僕はおじさんに何かお礼がしたかった。

「おじさん、何か僕にしてほしいことない？」

おじさんは手を横に振って、鴨居の写真を見た。

家中の者が忙しく祝宴の準備をしている間、僕と洋二おじさんは風呂に入った。風呂からあがっておじさんについて部屋に入ろうとしたとき、ばあちゃんが台所から飛び出して来た。そして僕の肩をつかんで内緒話をした。

「洋二の足はあったか？」

「あるに決まっているだろ。歩いてんだから」

僕が不機嫌に答えたのに、ばあちゃんはニーツと笑って、

「そうか、あったか。あったか」

うかれた声で喜んだ。

風呂からあがると、盆と正月にしか飲めないカルピスが座卓の上にのっていた。客用の白いストローが、水にささえられて斜めに立っている。十分にひえひえであるサインのように、ガラスコップの表面には水滴が並んでいた。風呂上りで咽は乾いているが、僕はめつたに飲めないカルピスの甘さを十分楽しみたかった。それで少しづつ口に含んでは、顔を左右にゆっくり傾けて、舌の上で白い露を転がしていた。

「真二君はカルピスが大好きなんだね」

「遠慮することないよ」

僕が重ねて言うのと、少し考えてから答えた。

「それじゃあ、手間を取って悪いけど、アルバムを見せてほしいな」

「ちっとも、悪いことなんかないけん」

僕は仏壇の下の小さい引き戸の奥から、黒くて分厚い写真帳を取り出した。それは中の台紙も真っ黒な厚紙で作ってあって、頑丈にできていた。写真自体に糊をつけ貼るのではなく、写真を差し込む白い三角の紙が、それぞれの写真に合わせて台紙に張り付けるようになっていた。昔は写真が貴重品であり、大事にされていたことがわかる。

おじさんのアルバムをめくる手が止まっているのに、僕は気が付いた。穴があくほどじーっと見つめている。きれいな女の人の写真だ。

「その人、美人でしょう」

おじさんの顔が赤くなった。

「おじさん。その写真ほしい？ あげようか？」

「とんでもない。一枚しかないものをもらえないよ」

「えっへーん。実はその写真はもう一枚あるのです」

僕は見慣れたアルバムの中から、目当てのものを探した。

「ほら、ここに同じのがあるでしょう。一枚なくなっても誰も困らないし、気にしないよ」

台紙から写真を抜きとって、僕は写真の裏に書いてある文字を読んだ。

「和子 女学校卒業」

切れ長の潤んだ瞳、筋の通った鼻、桜の花びらのような唇。それらを持った天女は微笑んでいた。少し惜しいような気もしたが、手を左右に振って遠慮するおじさんの手の平に、僕は写真をのせて言った。

「カルピスと宿題をもらったお礼だよ」

おじさんは黒い手帳を出し、大切なものを扱うように、何も書いていない真っ白なページの間にその写真を挟んだ。

にわかには表の間がにぎやかになった。春三おじさん一家が来たようだ。

「戦争が終わってから二十年たつに、本当に戦死したおじさんが帰って来なかっただ？」

次女の良子ちゃんのかん高い声が聞こえてきた。一家はどかどかと部屋の中に踏み込んで来て、おじさんの顔をじろじろ見た。

「ほんに、洋二あんちゃんだ」

春三おじさんはわざとらしく両手を広げて大きな声でおどけてみせた。そして僕たちにウィンクした。

祝宴の準備が始まった。表の間と仏間のあいだの襖がはずされ、僕と洋二おじさんは軟禁状態から開放された。

とうさんと充にいちちゃんが、テーブルを三個くっつけて置いた。そして納戸から座布団を運んできた。誰がどこに座るかを、とうさんが決めた。にいちちゃんは口の中で名前を復唱しながら、座布団を等間隔に手際よく配置していった。弘美ねえちゃんは、座卓の上を馴れた手つきで拭いてから、おかあさんの指示通りにご馳走を並べていった。春三おじさんちの英子おばさんや三人の娘たちも、入れ代わり立ち代わりして料理を運んでいる。

真ん中におさしみの舟盛りがおかれた。中央で鯛が天井をにらんでいる。その周りには、波に見立てたよ

うに大根の線切りが敷きつめられ、その上に赤貝、イカ、タコ、ブリ、タイのお造りが四、五切れずつ並べである。波に浮かんだように食用菊が散らしてあり、梅の花びらの形に細工して花芯に黄緑のわさびが乗った人参も飾ってある。竹と松の葉っぱも彩りをそえ、鯛の頭元には「祝」と書いた赤い旗がたててあった。

ばあちゃんが心をこめた料理も並んだ。大鉢に盛られたサトイモ、人参、厚揚げとしいたけの煮物。一センチの厚さに切り、行儀よく並んでいるあご野焼き。

大皿の上に盛り上げられたエビのてんぷら。松崎家秘伝の糠みそ床で色よく漬った、ばあちゃんが畑で育てたナス、キウリ、ニンジン、大根の漬物。春三おじさんちの三女、三才の京子ちゃんの手の平くらいの大きなぼた餅も、大皿に三十個ぐらい、ぼたんの花みたいにしつらえてあった。充にいちちゃんが置いたためいめの割り箸の左側には、茶碗に山盛りの赤飯がのよそつてあり、その右には僕の大好きな春雨の入った茶碗蒸しがあった。そして果物カゴにはバナナが四房も、ピラミッドのように積まれていた。

「がいなご馳走だがん」

次女の良子ちゃんが目を見開いて声をあげると、三女の京子ちゃんが手をたたいて笑いながら飛び跳ねた。食膳の準備が整い、充にいちちゃんが座る場所を指示し始めた。上座はもちろん洋二おじさんの席だ。テーブルが九十度曲がった向う側にはばあちゃん、続いて春三おじさん、英子おばさん、その娘たち。反対側にはとうさん、にいちちゃん、僕、ねえちゃん、かあさんの順だった。かあさん以外の者は席に着いた。

「かあさん、一旦、座るだがん」

おとうさんの声でおかあさんはエプロンで手を拭きながら正座し、大きな息をついた。

おとうさんが挨拶した。

「エー、本日は洋二が無事帰ってきたお祝いの会をできますことを、本当に嬉しく思います。ばあちゃんが腕によりをかけて、洋二の好物ばかりをこしらえまして。ご先祖さまに感謝しながらみなで乾杯しましょう。乾杯！」

「カンパニー」

「乾杯」

全員がビールやジュースの入ったコップをカチン、

コチンと音をさせ、笑顔で乾杯した。

「ばあちゃんがビール飲んでる」

僕が驚きの声をあげると、

「センババは洋二が帰ってくるまで、酒断ちして願を掛けてたんだがな」

春三おじさんの声を聞きながら、ばあちゃんは目を細めてビールを飲み干した。

「さあ、いっぱい食べてごしな」

おとうさんの声を合図に、皆がご馳走に箸をつけた。おいしい、うまい、を連発してひとしきり飲んで食べて、お腹がいっぱいになったところ、春三おじさんが口火を切った。

「ほんに、センババ、良かったなあ」

春三おじさんはばあちゃんの肩に手をかけたあと、背中をゆつくりさすった。ばあちゃんは大きくうなずいて、洋二おじさんの顔を見た。

「これで和子ねえさんが生きとられたら、姉弟みんな揃いますがん」

洋二おじさんの顔色を見ながら、英子おばさんが言った。何故だか洋二おじさんは眉間に皺を寄せた。

「僕、知ってるよ。和子さんって、とうさん達のお姉さんでしょ？」

僕の言葉にうなずきながら、英子おばさんは続けた。「私は会ったことはないけど、和子さんは村一番の美人だったんですが？」

「そげだで、わしの友達やちは和子ねえさんの顔見たさに、用もないに遊びに来とったもんよ」

とうさんが答えると、

「様子ちゃんによう似とられましたよ」

かあさんが口をはさんだ。皆が春三おじさんの長女の顔を見た。様子ちゃんは恥じらいで真っ赤な顔をしながらも、三女の京子ちゃんの口に鯛の刺身を運んでいる。僕と様子ちゃんは同級生だった。美人なうえに成績も氣立ても良い様子ちゃんは、僕の自慢のいここだった。

「和子さんの息子さんのコオちゃんは どうしておられますかね」

また、英子おばさんが聞いた。

「おばあさんは自分で育てたかったが、コオちゃんの将来を思っ、コオちゃんのお父さんの里の、東京の

旧家に連れて行きなつたですがん」

かあさんの話は、僕には初めて聞く内容だった。

「その子はこの家にいたの？」

僕が質問すると、とうさんが答えた。

「コオちゃんのお父さんは東京の人で、大学をでたあと、戦争が始まる前に、中学の先生として米子に赴任しとつたんだ。その時和子さんを見初めなさつて結婚して、コオちゃんが生まれて幸せに暮らしてなさつたのに、戦争が始まって出征して戦死しなつた。戦死を聞いたショックで、体の弱かった和子ねえさんはこの家で療養してたが、後を追うように病気で亡くなつたんだが」

たまりかねたばあちゃんが急に叫んだ。

「戦争が悪いんじや！戦争さえなければ、皆で一緒におれたのに。ずーっと、一緒におれたのに……」

ばあちゃんは前掛けで目頭を押さえ、むせび泣いた。一座は静まり返った。

「今日は祝いだけん。踊るぞ」

春三おじさんが立ち上がった。

「あんちゃん、いつものを歌ってごしな」

頼まれたとうさんが貝殻節を歌い出した。

「なんの因果で 貝殻漕ぎ なるたー」

—— かわいやの かわいやのー

皆が合いの手を歌った。表の間の空き畳で、春三おじさんは船をこぐ仕草をして踊り、良子ちゃんと京子ちゃんもその横に並んで踊った。他の観客たちは、手拍子で余興を盛り上げた。

昔の話や近所のうわさ話、政治経済など四方山話を肴に大人達が長々と飲み食いしている間、子供たちは五目並べ、兵歩廻りやトランプをして時間を過ごした。そして一番小さい京子ちゃんが英子おばさんの膝枕で寝てしまふところに、やっとな宴はお開きとなった。

祝賀会が終わり、僕は洋二おじさんと一緒に、僕とにいやんの部屋に引き揚げた。蚊帳がつつてあり、その中に布団が三組しいてあった。おじさんと僕は、蚊帳の外で並んで膝をついた。

「せーのーでと、声をかけて、一緒にまくって入ろうか？」

僕が聞くと、おじさんは違う合図を提案した。

「ワン、ツー、スリー」

僕らは蚊が入り混まないように声を合わせ、すばやく蚊帳をめくり上げて体の後ろ側に下ろした。その後、かあさんが手に浴衣を持って部屋に入ってきた。そして布団の横の畳に膝をつき、浴衣を蚊帳の中に入れた。「これは、おばあさんが洋二さんのために縫ったものです。毎年夏の終わるたんびに洗って糊をかけなおして来ました。これを是非着てやってください」

洋二おじさんは低く「はい」と答え、唇をかみしめた。

おじさんは浴衣に着替えると布団に腹ばいになり、枕を腋の下に入れた。そして荷物から取り出した、難しそうな漢字や英語がたくさん連なった分厚い本を読み始めた。僕も布団に入った。目を閉じて、今日おきた出来事を思い返していた。ふと、僕は片目を開けて、おじさんを見た。おじさんは黒い手帳を開いて、静止していた。たぶん和子さんの写真に見入っているのだろう。おじさんを見張りながら、僕はいつのまにか眠っていたらしい。祝宴の片付けの終わったにちやんが入っ

て来た時に、目が覚めた。にちやんはおじさんに何か囁き、部屋の電気を消した。目を開けたままボーッとしていると、蚊帳のあちこちではかなげな光が浮かんで消えた。

「蛩って、悲しいくらいきれいだね」

おじさんがつぶやいた。

「コオちゃん、コオちゃん。あんたは東京の孝治君なんだが？」

蚊帳が動く気配と、とうさんの低い声で僕は目が覚めた。部屋は真つ暗だった。とうさんの持っている懐中電灯が闇の中に浮かんできた。隣に寝ていた洋二おじさんが跳ね起きて、浴衣の乱れをなおす音がした。

「大きくなっていたので、孝治君だと初めはわからなかった。写真とあんましく似ちようので本当に弟の洋二が帰って来たんかと、一瞬思ったほどだった」

「黙っていてすみません。センおばあさんがあまり喜ばれたので、本当のことが言いだせませんでした」

「こちらこそ、おばあさんの夢物語につき合わせて、すまんかったな」

僕は闇夜に目が慣れてきたので、とうさんとおじさんに深々と頭を下げたのがわかった。

「大学生の最後の夏休みなので、大山に登りに来ました。子供のころ母と一緒に見上げていた山に一度登山してみたかったです。帰りにお墓参りさせてもらっていたら、真二君と偶然出会いました。決しておさがせるつもりはありませんでした」

「コオちゃんの気持ちはよくわかったでしょうよ。でも、悪いが、おばあさんが起きるまでに出発してごしない。

わしが軽トラで駅まで送って行くけん」

話の間、僕は眠ったふりをしていた。おじさんどんな顔をして合ったらよいかわからなかったからだ。薄目を開けて、僕は狸寝入りを続けることにした。おじさんは懐中電灯の灯りをたよりに身支度をして、おそらく三分もかからず荷物をまとめて準備した。

「充君、お世話になりました」

おじさんは、押さえた声でにちやんに挨拶をした。

「孝治さん、お元気で」

「東京にすることがあったら教えてください。今回のお礼にあちこち案内させてください」

クソッ。にちやんはおじさんの正体を知ってたんだ。知らないのは僕とばあちゃんだけだったんだ。僕は唇をかんた。蚊帳を出る前に、おじさんは僕に声をかけた。

「真二君、楽しかったよ。ありがとう」

おじさんが部屋を出たあと、僕は両目の間が熱くなってきた。なんだかじつとしていられなくて、僕はおじさんのあとを追った。

トラックのエンジンをふかす音がした。僕は門まで走ったが、車は走り去ったあとだった。僕はあわてて納屋の二階に上がり、遠のいて行くテールランプを眺めていた。山の端がうっすら白んできていた。

僕のむき出しの腕に水滴が落ちた。いつのまにかばあちゃんが後ろに立っていた。ばあちゃんは僕の肩に手を置いたけれど、視線はトラックに注がれたままだった。

「ばあちゃん、終わったね」

僕がつぶやくと、

「いんや、夏は終わっとらん」

センばあちゃんは力を込めて言った。